

社会学と文学のあいだ

対話者：井上 俊
企画者：東北大学 寺田 征也
 東京大学 鈴木 洋仁
 早稲田大学 高橋かおり
コーディネーター：立教大学 奥村 隆

社会学は他分野からなにを摂取できるのか。とくに文学からの学びを通じて、社会学はどのような成果を得られるのだろうか。本フォーラムでは、日本社会学会会長講演「社会学と文学」（2008年、『社会学評論』59巻1号、2～14頁）などにおいて、「社会学とそれ以外の分野との融合」や「社会学の対象としての文学作品」を論じ、社会学の対象領域拡張を試みてこられた井上俊氏と、「社会学と文学のあいだ」というテーマをひとつの軸にしながら、対話を試みる。まず企画者が以下の発題を行い、井上氏からリプライをいただいたうえで、フロアをまじえて話し合っていきたい。そこから、このテーマや各発題での論点にとどまらず、より広く井上社会学の独自性・今日性や、社会学が他のなにとの「あいだ」に成り立つものかという学際性などについて、新しい知見が開かれることを期待している。

(1) 社会学と「社会学以外」とのあいだに——鶴見俊輔研究の観点からの問いかけ（寺田征也）

「社会学と文学」において、文学や芸術を対象とした社会学の方向性を論じた井上社会学の企図を、自身の鶴見俊輔研究を深めるために摂取したい。

鶴見はいわゆる大衆文化論や限界芸術論を通じて、「学知」とは別様の「大衆の知」の可能性を強調すると同時に、かれ自身が文学や漫画に対して一種の「思想書」として向き合ってきた。井上もまた、「文学に助けられながらなんとか社会学をやってきた」（「社会学と文学」2頁）と、「社会学」と「社会学以外」とを往復があったことを述べている。両者は『思想の科学』などを通じた交流があり、井上は鶴見を間近に見て来た社会学者の一人であるが、では井上は鶴見の仕事を社会学者としてどう評価しているのか？ 井上の仕事に鶴見はどう影響したのか？ 社会学は鶴見をいかに摂取できるのか？ 外在的であるが、一人一人が社会学と「社会学以外」とどうコミュニケーションしうるのか、問いかけたい。

(2) 社会学と個人芸——知識社会学（者）の知識社会学（鈴木洋仁）

「社会は文学的現象である」（「社会学と文学」12頁）とするならば、無数の「他人の作った物語」のなかから、どれを、どのように解説するのか、その妥当性や説得力は、分析者のセンスに依存するのではないだろうか。そしてその手つきが適当だと認められる資格や能力は、万人に備わっているわけではない。それどころか、井上氏は、卓越した個人芸の持ち主だからこそ、自在に論をひろげてきたのではないだろうか。「平均型」や「制度」という記号に象徴される社会学内部においては、ともすれば職人芸にしか見えない井上社会学の、知識社会的な見つけ直しを、本セッションで試みたい。その営みは、氏が気負わずに背負ってきた戦後社会（論）の、現在からの捉え返しにもつながる。知識社会学（者）の知識社会学に踏み出す無謀な蛮勇は、「若手」だからこそ許された特権なのだと信じて、氏との「遊び」に興じてみたい。

(3) 社会学者と芸術の作り手のあいだ（高橋かおり）

井上俊の芸術社会学、特に文学社会学の諸著作は、日本において芸術や文学を社会学の俎上に載せた研究の先駆けである。研究対象として芸術を扱うだけでなく、芸術からの研究の示唆をうけることで社会学は豊かになり、この相互テクスト性から両者の交流が生まれる、と井上は述べる。企画者自身は芸術生産の現場（現代美術・演劇など）でのフィールドワークを行い、芸術の作り手（芸術家）の現状や彼らが抱える困難について調査してきた。そこで「芸術の作り手」に焦点を当てて井上の議論をとらえ直し、社会学者と芸術の作り手の共通点と差異、芸術（作品・活動）と社会学（の研究）の相互テクスト性などについて、今回の対話の場では光を当てていきたい。と同時に、2010年代の社会において、井上自身はいかなる文化現象や文学作品に「現代社会」が反映されていると実感しているのか、ということについても問いかけてみたい。